
ヴォルニカ物語

ふらむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴォルニカ物語

【コード】

N6765U

【作者名】

ぶらむ

【あらすじ】

とある村に住む少年、ミリファア。

ミリファアには母がいない。

「母に会いたい……」

そしてミリファアは旅に出る。

自分の母を探す旅へと……

エピソード

ぼくはミリファア。片手にはさびた剣。もう片手には古い木のたて。ぼくの横には小さな子犬。

ぼくが住んでる村の広場で、ぼくは剣をふるっていた。さびて、使い物にならないような剣をひたすらふるう。

けんかをしている訳じゃない。いわゆる、お遊びってやつだ。

え？なぜ母親は止めないのか？ぼくには母親がいなからさ。

お父さんはいるけどね。

いや、会ったことが無いだけで、本当はいるのかもしれない。

お母さんのことをお父さんにいつたら、とても苦い顔をしていた。

言いたくないのか、思い出せないのか、幼いぼくには良く分からない。い。

ぼくの家族はお父さん、3歳年上の姉がいる。

言いだしたら止まらないようなお母さんの話はここまでにして、話を進めよう。

さつきもいったぼくの横にいる小さな子犬はぼくの飼っているトムという。

昔、雨のなかに捨てられていたトムをぼくが拾ったのだ。

ちいさい体の所々にぶつんと黒い斑点模様がトムにはある。

どの犬にも当てはまらないから、トムは雑種なのかもしれない。

ぼくは、そんなことを考えながら剣を振り続けていた。

剣をふるうことを今すぐやめれば、ぼくは、この道を歩かなくて済んだらうか。

この、悲しく、空しい道を。

ぼくは、今悔やむ。

この道を、この運命に逆らう力が無かったことを。

始まりの昔話

ぼくが持った疑問。

この道を歩くぼくは、他人から見るとどのように見えているのだろう。

今は夜だ。

ぼくは布団にもぐりこんでいる。ごはんはまだ食べていない。

お父さんは、ぼくのとなりに座っている。お腹はすいていないのかな…。

姉さんがキッチンでなにかをやっている。

いいにおいがしてきた。

ああ…、我慢の限界だ。

ぐうぐう…

ぼくのお腹が大きな音をたててなった。

それと同時にテーブルの横にお皿が置かれた。

置いたのは、ぼくの姉さん、ラストだ。

容姿は普通より上ぐらいの美人さんだ。

ラストはにっこり笑って言った。

「あついうちに、早く食べちゃいなさい。」

「うん」

お父さんも、笑った。

「すまん、ラスト。」

「いいえ、クロロア父さん」

こんな感じで夕食の時間は過ぎて行った。

寝る時間だ。

「おやすみ、ラスト。」

「おやすみ」

しかし、おやすみと言ったものの、なかなか寝付けない。もぞもぞしていると、

「どうした？ミリファア」

と、お父さんが話しかけてきた。

なかなか寝付けないと言うと、

「では、私がお話を聞かせてあげよう。」

お父さんの話はこうだった。

昔、ある国に美しい姫が生まれた。

姫は、大切に、大切に育てられた。

姫は大きくなり、婚約者もでき、充実した毎日を送っていた。

しかし、姫を欲しがる別の王子が、姫を連れ去ってしまった。

姫は城に閉じ込められ、泣いていた。

そして、星に願いをかけた。

元の城に戻りたいと、婚約者に会いたいと。

その願いに、星が答えた。

星は姫を救って、王子に罰を与えた。

そして、姫は元の城に戻り、婚約者にあうことが出来た。

姫は、自分を救ってくれた星をこう呼んだ。

ヴォルニカ《聖なる星》と…。

ぼくはポツリとつぶやいた

「ヴォルニカ…」

なんとなく…懐かしさを感じる。聞き覚えがあるという感覚が生まれた。

なぜだろうか。

お父さんはそんなぼくをみて、微笑んだ。

「さあ、寝なさい。明日、起きれなくなってしまうぞ」

なぜなのか、そんなことを考えていたら、寝付けなかったことなど忘れてしまったように眠れた。

街に

ヴォルニカ《聖なる星》

それは、美しくも哀しきモノ。

目が覚めた。

「やあっと起きた！今日は街に出かけるんだって、父さんが昨日話してたじゃない！」

ぼくは、その言葉を聞いて、時計を見た。

9時00分ジャスト。

……

「うわああああああ！！！！！！！！」

最悪だ。よりによつて、こんな大切な日に寝坊するなんて。

今日は、家族揃って街まで行く日。

昨日寝つけなかったのはこのイベントがあったからだだったのだ。

ぼくは、この日をずっと楽しみにしてた。

なのに寝坊するなんて…！

魔法のように早く用意が終わった。

「さあ、街へ出かけるぞ」

お父さんが言った。

街だ。

ぼくとラスタは目を見張る。

当然だ。ぼくらは村から出たことが無いのだから。

だからこそ、ぼくはこの日を楽しみにしてたのだ。

ぼくとラスタが握りしめているのはお金だ。

この国のお金の数え方は、「円」でも「ドル」でも「セント」でも

ない。

「オリア」だ。

ぼくの手の中には、1万オリア。ラストの手の中には、1万5千円オリアだ。

「楽しみね」

「うん」

お父さんが言った。

「私は向こうに行く。お前たちは自由に行け。では、6時に待ち合わせだ。」

「はあ〜い」

「ではな。」

お父さんと別れて、ぼくらは防具屋に行った。

「わあ…」

ぼくらは目を輝かせた。

鎧や兜。それぞれに埋め込まれている宝石がとても綺麗でたまらなかった。

ずっとそれを見ていると、店主のおじさんは、

「ハハハ。あまりもんでいいならやろうか？」

「いいの!？」

「ああ。あ、待てな…」

そう言うとおじさんは奥でゴソゴソやり始め、しばらくすると…

「ホレ。持ってけ。大事にしてくれよ。」

と言って、ぼくらに宝石を渡してくれた。

ぼくには深紅のルビー。ラストには蒼く輝くクリスタルだった。

しかし、ラストのだけ、ネックレスにしてある。

ぼくは少し不機嫌になった。

その様子を察知したおじさんは、

「ああ、ぼつやにはこれだ。」

そうしておじさんが取り出したのは、

「これ…剣!」

「ああ、剣だ。鞘もあるぞ。」

ぼくは、さらにあることに気がついた。

「ん？持つ所に、穴がある…」

ぼくがそういうとおじさんはひょいとルビーを取って、持つ所にはめた。

キイン…

不思議な音をたて、剣が光り輝いていた。

「もってけ！」

「お金は…」

「いらねえよ。初めて来たんだろ？その記念さ。」

そしておじさんは笑っておくに引っ込んでった。

「あっ、ありがとうございます！！」

そしてぼくはおじさんからもらった剣を、鞘にしまった。

「ん？」

ラストが言った。

「なに？」

「もう6時よ！」

「待ち合わせ場所に行かなきゃ！」

「遅いぞ」

お父さんが待つていた。でも怒ってないみたいだ。

「ごめんなさ〜い」

「まあいい。村に帰るぞ」

「はあ〜い」

家に帰ってきたころはもう夜だった。

お風呂からあがってきたら、お父さんとラストの話し声が聞こえた。なんとなく隠れて聞いてみた。

「ふう…」

「どうしたんです？父さん」

「いや…少し考え事があつてな」

「なんですか？考え事って」

「ヴォルニの話のことだ。お前にも昔話したろう」

「ああ…母さんがいたころですね」

「……………」

ぼくは驚いた。

ラストが小さい頃、母さんはここにいたんだ…

「あれはな、妻…お前の母のココロに聞いた話をもとに作ったんだ。」

「

「……………」

「そうだったの…！」

ラストも驚いてるみたいだ。

（お母さんに…会いたい）

ぼくは、初めてそう思った。

この家を捨てても。

そして、ぼくはある決心をした。

夜明けがきたらここを出る！

そしてお母さんを探すんだ！！

森の民

夜明け。

ぼくの、新しい時間の始まり。

片手には新品の剣。

もう片手には、新しく作った木の盾。

ぼくの横には子犬のトム。ぼくの相棒となる犬だ。

よし、旅の準備は完璧だ。

ぼくは地図を広げた。

この村のすぐよこに「せいこう聖光の森」がある。

まずはそこに行こうかな…。

「ミリファア」

聞き覚えのある声が出た。

ふりかえると…

「ラストア！」

あちゃー。黙って行こうと思ったのに。

「私たちは姉弟よ。あなたの考えてることなんかお見通しなの。」

しばらく沈黙が続く、

「元気でいなよ。姉がこれだけたのんでるんだから言うこと聞きな

さい」

「え…」

「二回目は言わないわよ！じゃあ、行ってらっしゃい」

そう言ってラストアは、家の中に入って出てこなかった。

「…行ってきます」

しばらく歩いたのに、まだなのか…

少し疲れてきた。
もつと歩く。

なにかが見えた。

「森…だ！」

走って中へ入る。

入口に張り紙が張ってあった。

『魔物が頻繁に出てきますのでお引き取りください！』

ぼくは無視する。

するとさっそく…

「ピー！」

上から鳥の鳴き声が聞こえた。

鳥が降りてきた。だけどぼくは見抜いていた。これは魔物だ。

ばしゅう！

剣を振る。ヒットした。

小さくガツポーズ。

どンドン落ちてくる。

むちゃくちゃに振るっても必ずヒットする。

ぼくは本で読んだことがあった。

魔物が発する黒い液はあらゆるものを溶かす力があるらしい。

だから、ぼくはそれに注意しながら戦った。

でも全然かけてこない。

すこしぼくが浮かれたとき…

「きゅうつさきいかてれえこおおがじいじえさきゃきおああ…！！

！」

意味がわからない奇声を発しながら黒い液が向かってきた。

「ぐっ…うつ…」

かろうじて避けられたが剣のさきっぱが溶けた！これじゃあなにも

切れない…！

再び黒い液が顔めがけて…

ズドン！

ぼくは無事だった。でも、さっきのズドンという音はなに？

「無事だったか？」

綺麗な声。でも君は…

「私は森の民。リアックアだ。」

いきなりぼくを救ってくれた少女。リアックア。

正体はまだ、わからない。

リア＝クア

「リア＝クア…？森の民？」

やっこのことまで出てきた言葉。

たけど、リア＝クアは無視し、あたりを見回す。

そして、いきなりぼくの手を掴み、風のように走り出した。

「うわあッ…！」

力がすごく強い。

しばらくすると、広い場所に着いた。中心に大きな大きな木がある。

木の木陰にぼくを置くと、座り込んだ。疲れているのかな？

ちかくで見ると、驚いた。

すごく綺麗だったからだ。

そこいらの人はケタはずれだ。

自己紹介をして…

遠慮しながら聞いてみた。

「あのおう…リア＝クアさん。森の民ってなんですか？」

「タメ口でいい、リアでいい。森の民も知らんのか？無知なやつだ」

口調は厳しいけど、声も綺麗だ。

ぼくは頷いた。

リアは溜息をついて言った。

「いいか？森の民とはな…」

そうしてリアの話が始まった。

昔、世界は汚れきった人間で埋め尽くされていた。

盗み、人さらい、違法薬物乱用、殺害などをする人間で。

森の民はそれを見ていられなくなり、いつからか罪を犯した者どもを裁くようになった。

すると、どんどんと罪を犯す者は減っていった。

このころ、森の民たちは罪を犯す穢れた者のことを「罪犯・レヴン

」と呼ぶようになったらしい。

しかし、生き残った罪犯たちは仲間を奪った森の民へ復讐するために、「森狩り」を始めた。

森狩りとは、憎き森の民を滅ぼす、罪犯が始めた行いである。森狩りによって森の民の数は激減していった。

「…そして今に至るわけだ。私の両親も森狩りによって失った」
リアのこぶしが震えてる…。

「リ…」

ドオオオオオオオオオン！！

爆音！？

音のした方へ目を向けると…

「森が…！」

火事だ！

リアはすごい速さで走り、奥へ消えていった。

急いで追いかけると2人の男とリアが戦っていた。

「お前！聖光の森になにを！」

リアの怒声が聞こえてきた。

リアはおこっているみたいだ。

男Aの両手にはライターとガソリンを持っている。

あいつが火を放ったのか！

リアは男Bによってこけている！

危ない！

考えるより早く手が動いていた。

あれ？剣先がなおってる。

そっぴや、さつきリアが磨いてたな。

鋭くなった剣でリアを助けることに成功した。

ぼきも戦いに入って形勢逆転。

あっというまにカタがついた。

「ミリファー」

「ん？」

「ありがとう」

「どういたしまして」

「いや、恩は返さなければならぬ。お前に恩返しをしなければ」

「大丈夫だよ？」

「うーん…、そうだ、お前の仲間に入れてくれ。そうすればお前を守れる」

そんなこんなでリアが仲間に加わった！（ゲーム風）

「次はどこへ行こうか？」

「ここを少し歩いたところに街がある。ここに行こう？」

「うん、よし、つぎの行き先は、『バルカの街』だ！」

バルカの女性

「ミリファア……」

誰かがぼくを呼んでいる。

君は……誰……？

「ミリファア！いくぞ！」

ぼくはリアの声で目が覚めた。

そうか…今、ぼくたちはバルカの街に行く途中なんだ。

ぼくは立ち上がる。

なんだろう、とても懐かしい夢を見ていたような気がしたんだけど……。

でも、深く考えないようにしよう。

そうしてぼくは、歩き始めた。

バルカの街をめざして。

やっとだ…ついに…バルカの街に……

「ついた」

リアがあっさり言う。ぼくの苦勞を返せと一瞬言いたくなった。

ぼくは深呼吸して言った。

「とりあえず、食料を調達してから宿屋に行こうか。」

リアがあたりを見回してちよつと遠慮ぎみに言った。

「でも…ミリファア、ここには宿屋が無いみたいだぞ？」

そう言われてぼくも360度回転し、あたりをキョロキョロ見回した。

「ほんとだ……」

たしかに、ここには宿屋らしき建物がない。

「……でも、食べ物はあるだろう。食べてから考えようよ」

リアもぼくの意見に賛成したみたいだ。小さく頷いた。

ぼくは、持っているオリアでハンバーガーを3つ買った。
ひとつはリアの、もうひとつはぼくの。

じゃあもう1つは？と思っっている方もいるだろう。
みんな忘れていないか？ぼくの相棒、トムのことを。

2人と1匹が食べ終わるとイスに腰掛けて喋ろうとしたが、その前
にリアが

「それでは……………どうする？ミリファア」

「ミリファア……………ミリファア！？」

ぼくのすぐ後ろにいた女性が叫んだ。

ぼくはびっくりしてふりかえる。

「あ・すみません。あ…あの、あなたはミリファアさんですか？
なぜぼくの名前を知っているのだろうと思いつつも頷いた。

「ああ！やっぱり……………ミリファアさん、あなたの母から
伝言を預かっています」

「……………！！？？」

「……………ついてきて下さい。」

名も知らぬ女性は後ろを向いて歩きだした。

ぼくは言われるがまま女性の後ろをついて行った。

母への手がかりがつかたような気がして嬉しい気持ちと、母は無事
なのか不安な気持ちが入り混じりあって

ぼくは不思議な気持ちだった。

トムは、そんなぼくの気持ちを察したように小さな声で短く鳴いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765u/>

ヴォルニカ物語

2011年10月10日10時56分発行